

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号
------	---------

氏 名 横山 真衣

論 文 題 目 目標志向性と学習観の関係の検討と学習目標志向性を  
高めるための教育的介入に関する研究

### 論文審査担当者

主 査 名古屋大学教授 三輪 和久

委 員 名古屋大学教授 川合 伸幸

委 員 名古屋大学教授 石井 敬子

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、学習者の適応的な学習行動を促進する要因として、個人の目標志向性と学習観を取り上げ、両者の関係を明らかにしている。目標志向性とは、学習者個人の達成目標に関する特性であり、以下の3つがある。(1) 学習目標志向性：挑戦を通して新たな知識や技能を習得することを目標とする、(2) 遂行接近目標志向性：肯定的な評価を受けることを目標とする、(3) 遂行回避目標志向性：否定的な評価を避けることを目標とする。一方、学習観とは、「学習とはどのようなものか」に関する学習者個人の信念である。

第1章「序論」では、本論文の鍵概念となる目標志向性と学習観について説明し、これらが学習行動に影響を与える重要な要因であることを示している。

第2章では、目標志向性が、直接的に、もしくは学習観を媒介して間接的に、学習行動を規定するというモデルに基づき、学習行動に対する目標志向性と学習観の因果関係を検討している。その結果、以下の3点が明らかになった。(1) 学習目標志向性が高いと適応的な学習行動を促進する学習観を持つ。(2) 遂行接近目標志向性が高いと適応的な学習行動を抑制する学習観を持つ。(3) 遂行回避目標志向性が高いと適応的な学習行動を促進する学習観と抑制する学習観の両方を持つ。

第3章では、目標志向性のタイプ別に学習観を検討し、各タイプの特徴を明らかにすることを試みている。具体的には、低目標タイプ、高目標タイプ、遂行回避目標高タイプ、学習目標高タイプの4つのタイプの学習観を比較検討した。その結果、高目標タイプは、複数の種類の学習観を並列的に持ちあわせ、学習目標高タイプは自律的学習観を持ち、低目標タイプと遂行回避目標高タイプは、強制・記憶という学習観を持つ傾向が明らかになった。

第4章では、通常の「自己評価」と、学習者同士が互いを評価し合う「相互評価」が、学習目標志向性の向上に、どのように貢献するのかを検討している。結果として、相互評価の学習目標志向性の向上への効果は、学習者の遂行目標志向性の特性によって異なることが明らかになった。具体的には、相互評価は、評価実施前の遂行接近目標志向性が高い、もしくは遂行回避目標志向性が低い学習者に対しては、学習目標志向性を高めるために効果的であったが、逆の遂行目標志向性を持つ学習者に対しては、相互評価は学習目標志向性を高めるためには逆効果であった。

第5章「総括」では、3つの研究の結果をまとめた上で、各研究の意義を考察している。また、教育的示唆、および、目標志向性の研究に対する示唆について述べ、最後に、研究の限界と今後の展望について言及した。

教育現場におけるオーセンティックな実践データに基づき、丹念な統計分析を用いて明らかにされた知見は、当該領域に新たな見識を提供するものであり、その学術的価値は高い。よって審査委員は、全員一致して、横山真衣君が、博士(情報学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと判定した。